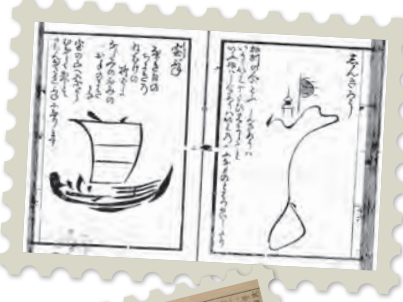




総合図書館

コレクションへの招待状

—世界中から集まった貴重な資料たち—



ごあいさつ

東京大学附属図書館は、大正12(1923)年の関東大震災で全焼し、70万点にもおよぶ資料を焼失するという甚大な被害を受けました。その後図書館は、ロックフェラーJr.氏の寄付により再建され、同時に国内外から数多くの資料の寄贈をいただきました。

当時の寄贈や寄付を記録した『東京帝國大學附屬圖書館復興帖』によれば、国内や欧米だけでなく、中国、インド、タイ、メキシコ、ロシア、ハンガリー、エジプトなど世界中の国々から約30万冊もの図書が復興支援として贈られたことが分かります。

また、この時期に紀州徳川家の蔵書であった南葵文庫や森鷗外の蔵書が寄贈され、青洲文庫が購入される等、文庫、コレクションの収集も行われています。

このように、総合図書館の蔵書の成り立ちには、他の大学図書館とは違う特別の事情があり、国内はもとより、世界中からの温かい支援の気持ちとともに集まった図書がその礎となっております。

東京大学附属図書館では、毎年、全学で所蔵する貴重な資料を学内外の皆様にご覧いただくため特別展示を行っていますが、今年度は、このような復興支援を始めとして、附属図書館の歴史の過程で収集された蔵書から、南葵文庫、鷗外文庫、英国書史関係集書など、特に選りすぐった総合図書館の11の文庫、コレクションをご紹介します。

この度の特別展示が、国内や世界からこの附属図書館に集まった図書に込められた思いを再度思い起こす機会となりますことを願っております。

また、東京大学附属図書館の歴史を感じながら、総合図書館コレクションの世界をお楽しみいただければ幸いです。

平成 26 年 10 月

東京大学附属図書館長
古 田 元 夫



亀井文庫

旧津和野藩主亀井家十三代当主亀井茲明^{これあき} (1861 ~ 1896) が5年間のドイツ留学中に収集した、主に19世紀に刊行された西洋美術・工芸関係の資料1,026部、1,958冊。没後、大正13(1924)年に当館へ寄贈された。

亀井は、宮内省御用掛在職中の明治19(1886)年、休職しドイツへ渡った。留学期間中に、ベルリン大学で美学や美術史を学ぶかわら、美術工芸に関する資料を精力的に買い集めている。その範囲は多岐にわたり、書籍、油絵、写真、陶器から、染織、デザイン画、壁紙、インテリア用布の図案資料まで約16,000点に及んだ。

亀井文庫はこのうちの書籍類であり、主に美術・工芸・建築・染織・ガラス・陶器などの分野の資料から構成される。美術史や理論書のほか、テキスタイルの図案集や見本帳が多数含まれる。美術・工芸分野が中心であるが、その周辺分野である工学・工業・自然科学の資料が含まれている点にも特徴がある。また、語学学習や旅行案内に関する書籍、留学の名目であったヨーロッパの儀式典礼に関する資料も含まれている。

なお、寄贈当時の亀井文庫には書籍以外に、ベルリン、プラハ、ローマ他イタリア諸都市への旅行で購入した観光写真と美術作品写真も含まれていたが、1969年から管理を本学総合研究博物館に移した。これらは現在「亀井文庫」西洋古写真コレクションデータベースとしてウェブ上で公開されている。

鵜軒文庫

鵜軒^{がっけん}文庫は、東京帝国大学医科大学教授であった土肥慶蔵^{どひけいぞう} (1866 ~ 1931) が収集した蔵書である。

土肥慶蔵は明治24(1891)年7月帝国大学医科大学を卒業。欧州留学を経て明治31(1898)年、東京帝国大学皮膚病梅毒学講座の担当教授となり、その後日本皮膚病学会会長などを歴任した。皮膚泌尿器科学の分野で大きな功績を残した一方、漢詩文にも親しみ、鵜軒と号したことから、蔵書は鵜軒文庫と名付けられた。

鵜軒が収集した資料は、所蔵目録によれば、総記、哲学、法制・経済・社会、史伝、地理、文学・語学、医学・本草学、理学・博物、芸術・諸芸、雑誌・雑書の十門から構成され、幅広い内容を含んだものであった。鵜軒文庫を入手した経緯は現在のところ不明だが、当館では第7門医学・本草学分野の資料を所蔵している。総数は1,544部4,618冊で、和漢医学や医学史が主流だが、吉原、遊女に関する資料なども含まれている。

鵜軒没後、彼の妻が三井財閥の出身だったこともあり、三井家(三井合名)が蔵書を購入し、一時期は三井文庫所蔵資料として扱われた。しかし第二次大戦などの影響を受け、鵜軒文庫は各所に分散することとなった。当館のほか、国立国会図書館(江戸時代から明治初年の日本人著作漢詩文集等)、東京医科歯科大学附属図書館(ドイツ語の医学書等)、カリフォルニア大学バークレイ校でも所蔵され、各所で今も生き続けている。

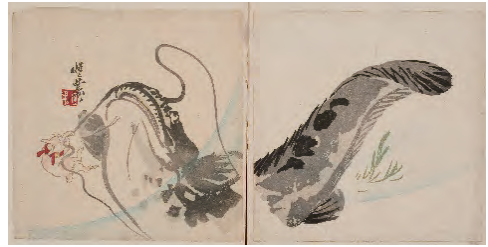


『解体新書』

石本コレクション

第二代東京帝国大学地震研究所長・石本^{みしお}巳四雄（1893～1940）の遺族が研究上の遺品を地震研究所と当館に寄贈したものの。

収集対象は、災害の際に出版されたかわら版や錦絵、新聞付録など。特に、地震が^{なまず}鯰に起因するものとして描かれた「鯰絵」と呼ばれる錦絵は、コレクションの大きな特徴となっている。



『鯰図と猫』

音楽、絵画、謡曲、俳諧、禅、水泳と多趣味であったという石本は、自らの講演の中でも、芭蕉と弟子の連句「大地震つゞいて龍やのぼるらん（似春）長十丈の鯰なりけり（桃青＝芭蕉）」を引用したことや、鯰絵収集への熱意から、地震と鯰との関係に並々ならぬ文化的興味を抱いていたと思われる。

当館には、かわら版・錦絵等約 500 点を 11 冊の折帖形式に仕立てた『地震火災版画張交帖』のほか、この張交帖に張り込まれていない約 100 点の資料が寄贈されている（地震研究所には冊子体のものが多く寄贈され、データベース化されている）。

張交帖のうち災害関係は約 7 割、残りの大部分が温泉案内・名所案内である。また、嘉永 7（1854）年の安政東海・南海地震と、安政 2（1855）年の安政江戸地震の際の出版物がコレクション全体の 8 割近くを占めることから、被害の大きさや当時の災害かわら版類の出版傾向が伺える。

田中芳男文庫

田中芳男（1838～1916）が収集した約 6,000 冊のコレクション。昭和 6（1931）年に孫である田中美津夫男爵より当館へ寄贈されたもので、我国における博物学及び博覧会関係の貴重な一次資料が丹念に収集・保存されている。この中には、安政 5（1858）年から大正 5（1916）年にかけて収集された様々なチラシ等の印刷物（商品の広告、料理屋の箸袋、催物のプログラム、招待状、その他）が貼り込まれた『^{くんしゅう}摺拾帖』（「くんしゅうちょう」、「くんじゅうちょう」とも）もある。

田中は若い頃、医術、本草学を名古屋の伊藤圭介のもとで学び、その後多くの博物資料・標本を収集した。また、慶応 3（1867）年パリで開催された万国博覧会に日本が初めて公式参加した際、出品準備から現地での展示業務までを幕府の命により遂行した。この時現地で収集した様々な印刷物を貼り込んで作成した『外国摺拾帖』も他に類を見ない貴重な資料である。

パリ万博をきっかけに、殖産興業の推進における博覧会自国開催の重要性を実感し、明治 10（1877）年、我国初の内国勸業博覧会（会場：東京、上野公園）をはじめ多くの博覧会開催に携わり、東京上野の博物館や動物園の開設にも尽力した。明治 39（1906）年に勲一等瑞宝章を、大正 4（1915）年には学術及び農林水産行政その他多くの分野における長年の功績が認められ、男爵の爵位を授けられた。



『外国摺拾帖』

南葵文庫

南葵文庫は、紀州徳川家の当主であった徳川頼倫(1872～1925)が麻布飯倉の自邸敷地で運営していた私設図書館である。紀州の「南紀」と、徳川家家紋の「葵」をかけて命名された。

明治29(1896)年、欧米漫遊中に諸外国の図書館を視察し、図書館の必要性を痛感した頼倫は、紀州徳川家伝来の2万冊を中心に同35(1902)年に文庫を設立し、旧紀州藩士の師弟および関係者に開放した。その後、家蔵本に加え購入・寄贈により蔵書を増やし、新館竣工を機に、明治41(1908)年には旧藩関係者に限らず一般にも公開した。また図書の閲覧だけでなく学術講演会などの文化事業も積極的に行い、わが国図書館史上特筆すべき活動を行った。大正9(1920)年刊行の『南葵文庫概要』によれば、一日平均120人ほどの利用があったという。

関東大震災の一ヵ月後、頼倫は当館復興のため蔵書の寄贈を決定し、大正13(1924)年7月に25,330部96,101冊の蔵書を寄贈した。ここに組織としての南葵文庫は消滅した。

蔵書は、漢学者島田重礼の雙桂楼遺書(中に島田の師・海保漁村の自筆本や書入本も含まれる)、依田学海遺書、山井重章旧蔵の漢籍、更には有職故実家坂田諸遠、国学者小中村清矩の旧蔵書や国絵図等の古地図コレクションなど、多くの貴重な資料を含んでいる。質・量ともに今日の当館の根幹をなすコレクションの一つである。

なお、当館1階洋雑誌閲覧室には、徳川慶喜の揮毫による「南葵文庫」の扁額がある。

青洲文庫

甲州の素封家である渡邊家の壽(1803～1875)、信(1840～1911)、澤次郎(1870～1911)の三代にわたる旧蔵書約30,000冊を、大正13(1924)年に入手したもの。文庫名は信の号である青洲による。

壽は主として和歌・国学関係を、信(青洲)は漢籍・歴史書関係を、澤次郎は浮世草子・洒落本関係を収集した。北宋古版である『元氏長慶集』、古活字版『文選』など善本が多く、額装の『南瞻部州大日本国正統図』(寛永頃)はわが国最古の刊行単独日本図として唯一現存するものと言われている。

文庫目録として、信個人の編纂による『青洲文庫古板書目』がある。この目録は、自序で信自身が「この目録はおのれ忙はしきなりはひの閑を偷みて、匆卒に編みつるものなれば、幾多の誤なきに非ざるべし」と述べているように書誌上の誤りが見受けられるものの、個人編纂の目録として高く評価すべきものである。

当館貴重書閲覧室には、伊藤博文と信とが将棋で賭けをして、負けた博文が揮毫したという言い伝えのある「青洲文庫」の扁額が掲げられている。この扁額は文庫購入時に寄贈されたものである。



扁額

霞亭文庫

明治・大正期の小説家、渡辺霞亭(1864～1926)の旧蔵書の一部である。江戸時代を中心とした小説・演劇関係の和書約2,000冊からなる。大正15(1926)年に書店より購入したもの。

渡辺霞亭は「碧瑠璃園」、「緑園」など13の別号を持ち、大阪朝日新聞をはじめとした新聞・雑誌に歴史小説や家庭小説を数多く発表して流行作家となった。また西村天因(1865～1924)らと共に雑誌『なにはがた』を創刊。関西文壇の重鎮と言われた。一方で江戸時代文学の収集家としても知られ、小説・演劇関係書を中心に良書を集めた。

文庫の内容は、御伽草子、舞の本、仮名草子、浮世草子、読本、洒落本、滑稽本、咄本のほか、江戸時代の通俗的な絵入り読み物である草双紙(赤本・黒本・青本・黄表紙・合巻)や、浄瑠璃、歌舞伎、歌謡など多岐にわたる。中には当文庫にのみ存在するという孤本も少なくない。

目録として、『東京大学総合図書館霞亭文庫目録』(1982)などがある。これは故市古貞次氏(当時国文学研究資料館長)の指導の下、当館で編纂した初めての書誌解題目録で、先に挙げた文庫内容は編纂時に項目分けされたものである。

また本文庫はマイクロフィルム化されているほか、「電子版霞亭文庫」にて、本文の画像データが公開されている(一部資料を除く)。



蔵書印

洒竹文庫

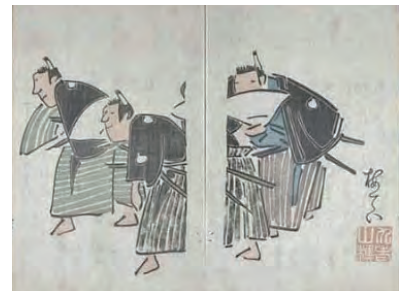
当館の俳書の中核をなすのは、洒竹文庫(江戸期のもの約3,000部)・竹冷文庫(同約750部)・知十文庫(同約300部)の3文庫であり、その他に諸名家旧蔵の俳書が約500部収蔵されている。今回はこのうち、最大のコレクションである洒竹文庫を展示する。

洒竹文庫は、俳人・医師であった大野洒竹(1872～1913)の収集した江戸時代の俳書コレクション。大野洒竹は一高時代に先輩の正岡子規に誘われて句会に加わり、東大在学中に角田竹冷らの秋声会に入り、また佐々醒雪・笹川臨風らと筑波会を結成した。26歳の時、尾崎紅葉・竹冷らと『俳諧文庫』24冊の刊行を開始する。

古俳書収集は、中学時代からの洒竹の趣味だったという。没後の大正5(1916)年、収集した俳書約4,000部(うち3,000部ほどは斎藤雀志旧蔵本)が、沼波瓊音の尽力により、洒竹文庫の名を永久に保存するという約束のもとに東大文学部国文学研究室に寄贈された。しかし関東大震災でほぼ1,000部が焼失。現在は約3,000部が当館に収蔵されている。

洒竹の俳書に対する深い学識によって博く収集された豊富な古俳書は、俳書研究の上で極めて大きな意義を持つものと言える。

現存の約3,000部はマイクロフィッシュ化され、知十文庫、竹冷文庫と共に『連歌俳諧書集成』に収録されている。



『名月帖』

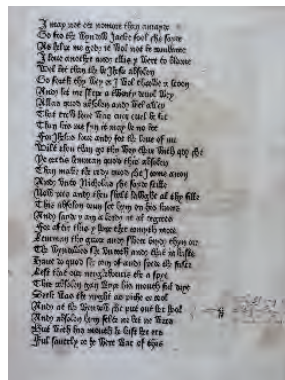
英国書史関係集書

1929年に関東大震災後の復興支援として英国政府から寄贈された、英国印刷史を研究する上で重要な、洋書163点からなるコレクション。

英国政府は復興支援のために約31,500冊の図書を寄贈するとともに、1924年には25,000ポンドの予算を計上し、被害の大きかった人文科学書、さらに自然科学、医学関係の図書を購入して寄贈した。その最後としてこの英国書史関係集書が贈られた。寄贈に先立って、1929年5月にロンドンの外務省内で展覧会が催され、ウィリアム・モリスによるケルムスコット版『チョーサー作品集』がその代表として、チェンバレン外務大臣から松平駐英大使に直接手渡されている。

このコレクションは、英国最初の印刷業者であるウィリアム・キャクストンにより1477年に刊行された『哲人の箴言金言集』の1877年ファクシミリ版から、『キヤドモン写本』の1927年ファクシミリ版まで、英国の印刷術の変遷が一望できるように構成されている。

オリジナルの資料としては、1478年にキャクストンが刊行した『カンタベリー物語』初版の零葉や、英国図書館の目録で12冊の所蔵しか確認されていない1515年刊行の『セント・オルバンズの年代記』など希少価値の高い資料が揃っている。



『カンタベリー物語』
初版零葉

ダンテ・コレクション

中世イタリアの詩人ダンテ・アリギエーリ(1265～1321)の叙事詩『神曲』を中心に、彼の主要な作品とこれをめぐる研究文献を収録したコレクションである(ダンテの著作133点、研究書47点、計180点236冊)。

昭和62(1987)年度に全国共同利用外国図書購入費(大型コレクション)として購入された。うち19点27冊が貴重書に指定されている。

『神曲』の写本は500余种あるといわれ、これらの原典にもとづいて、ダンテ学会版、ムーア版、デ・ヴィット版、スカルタツィーニ版、パジェット・トゥインビー版など種々の刊本が生まれているが、当コレクション中にはこのうちのいくつかの版が認められる。

また当コレクションには、書誌学的、美術的見地から見るべきものもある。1481年フィレンツェのニコラウス・ラウレンティーノから刊行された『神曲』は、ボッティチェリらのデッサンをもとにした、当時としては数少ない銅版彫りの挿絵がはり込まれている点で書誌学的価値が高く、この他にもギュスターヴ・ドレ、サルバドール・ダリなど著名な画家達の挿絵や図版が豊富に見られる点でも貴重なコレクションといえる。



『神曲』ニコラウス・
ラウレンティーノ刊行

鷗外文庫

関東大震災からの復興のため、大正 15 (1926) 年 1 月に遺族から寄贈された森鷗外 (1862 ~ 1922) の旧蔵書である。冊数は約 18,800 冊 (和書約 15,700 冊・洋書約 3,100 冊) に上り、内容は、哲学、漢文学、国文学、西洋文学 (主にドイツ語のもの)、歴史、自然科学、医学、軍事と多岐にわたる。主な資料としては、江戸時代に出版された武家の名鑑である武鑑、江戸古地図、古医学書、『於母影』等の翻訳に用いられた洋書原本、『渋江抽斎』等の史伝を執筆する過程で収集した参考資料や自筆ノート、自筆写本などが挙げられる。

それらの多くは柿渋色の表紙を付けて糸綴じし、鷗外自筆の題籤^{だいせん}を附した装丁となっている。また、鷗外自身が書入れをした資料も多く見られ、鷗外の人柄も窺い知ることができ、いずれも鷗外文庫を語る上では欠かせない特徴である。

書入れおよび自筆本のうち約 270 点については「鷗外文庫書入本画像データベース」として、資料の画像とともに書誌情報や解題をウェブ上で広く公開している。



『膳部之事』



参考 URL

- * 東京大学附属図書館のコレクション紹介 <http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/koho/guide/coll/collection.html>
- * 電子化コレクション (電子版霞亭文庫 / 鷗外文庫書入本画像データベース / 電子版『地震火災版画張交帖』ほか) <http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/koho/guide/coll/index.html>
- * 「亀井文庫」西洋古写真コレクションデータベース <http://www.um.u-tokyo.ac.jp/dm3/Database/kamei.html>
- * 東京大学地震研究所図書室特別資料データベース http://www.eic.eri.u-tokyo.ac.jp/dl/meta_pub/G0000002erilib

平成 26 年度附属図書館 所蔵資料展示委員会

委員

岡部幸祐 (委員長)、吉田左貴子、三浦圭子、森田美由紀、
安藤京子、宝来貴子、鈴木祐介、秦野寛子

平成 26 年 10 月 16 日 発行

編集

東京大学附属図書館所蔵資料展示委員会

発行

東京大学附属図書館

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1
電話 03-5841-2640 (情報サービス課)